

西郷隆盛の詩想

—みずからへのまなざし—

有馬 卓也

目次

はじめに

第1章 流刑時の詩

第2章 戊辰前後の詩

第3章 明治六年以後の詩

第4章 屈原・伯夷・叔齊・張良・韓信

第5章 己と心と

おわりに

はじめに

筆者は先に幕末維新期における志士たちへの漢詩文からのアプローチについて言及し、中国古典を教養として有する彼らは、共通語としての中国古典をモチーフに作詩を行い、しかもそれを相互に理解し得る同時代人であり、そこには各

藩各個の枠を超えた基盤が存在すると位置づけた。そして、これまで各論として米沢藩士雲井龍雄、及び長州藩士高杉晋作の漢詩に言及した⁽²⁾。雲井と高杉はともに激しい性情と詩想とを有し、「偷生」⁽³⁾を嫌悪しながらも労咳に冒されて「偷生」を余儀なくされ、自己矛盾を抱えつつジレンマの中で作詩を続け死に至ったという経歴を持つ（雲井は明治三年刑死、高杉は慶応三年病死）。しかし両者の詩想は、東北の敗者として終始辛酸を舐め続けた雲井が管仲・藺相如・張良といった中国屈指の政治家を自らに喩えたり、「嘉遯」⁽⁴⁾、「鳳兮」⁽⁵⁾といったモチーフを多用したりしたのに対し、維新の原動力とも言える長州の高杉は上海渡航以後「内憂外患」「狂」といったモチーフを多用して詩作を行うという、異なった形に具現化され、そこに時代や地域の反映も看取し得た。

本稿はこのテーマの各論の一つとして、幕末から明治初期にかけての雄、薩摩藩士西郷隆盛の漢詩をとりあげる。西郷は思想的・精神的な方面に於て何を問題とし、それにどう対処してきたのか。そして何よりも西郷は自らを如何なる存在

として位置づけていたのか。本稿では、西郷が残した漢詩を手がかりに、これら問題について考えてみたい。

西郷に対する史学的アプローチは様々な方向から試みられ、その数も膨大なものであるが、彼の漢詩を正面から対象とした研究はほとんど見られない。この点からも従来の西郷理解に対して何らかの新機軸が提出できればと考える。

*

明治一〇年西南戦争の際、官軍として従軍した旧会津藩家老山川浩が次のような和歌を残している。

薩摩人 見よや東の 大丈夫が

下げ佩く太刀は 利きか鈍きか

戊辰戦争の時、最後まで主戦派であつたとされる山川の無念を、今度は自らが官軍となって晴らせる、という胸の高ぶりが詠み込まれている。

ところが、かかる状況下にあつても、西郷個人に対しては、大久保利通の次男牧野伸顕の、

「西郷は全国の士族に圧倒的な人望があつた。奥羽、石川、水戸等、皆そうであつて、士族はすべて西郷の人物を仰いでいた」(『回顧録』)

という証言、或いは大町桂月の

「隆盛は明治十年に叛旗を翻したり。されど、今日、日本国民は、隆盛を崇拜するものこそ多けれ、国賊と目するものは、絶えて無かるべし」(『桂月全集第五卷』)

という証言がある。つまり西郷自身の評価は全く衰えること

がなかったという指摘であり、また西南戦争の首魁としての西郷に対しても次の福沢諭吉、重野安繹、渋沢栄一の証言の如くである。

「乱の原因は政府に在りと云ふて可なり。……之(西郷)を死地に陥れたるものは政府なりと云はざるを得ず」(福沢諭吉『明治十年丁丑公論』)

「十年の変は、隆盛、之を主とすと雖も、其の党の之を激成して、隆盛も亦制止するあたはず」(薩藩史研究会編『重野博士史学論文集下巻』)

「一身の利害を没却して、他のために計るといふ寛仁の態度は、維新三傑の内でも特に大西郷に其の著しきを見る。併し後日になつて冷静に考へて見ると、大西郷は余りに仁愛に過ぎて、遂に其の身を過らるるに到つたと云はなければならぬ。彼の明治十年の乱が起つたなぞも、畢竟大西郷が部下や門弟に対し余りに仁愛に過ぎた結果であつて、仁愛に過ぐる余り、其の一身も同志の仲間に犠牲として与へられたので、遂に彼の如き始末となつたのであると察せられる」(『青淵回顧録上巻』)

この点は官報『東京日々新聞』の福地源一郎を以てしても、「西南の乱は実に西郷翁の志にあらずして、……其身を以て羽翼の犠牲に供したる者なりと云はざる可からず」

(『明治文学全集十一』所収『福地桜痴集』)

と言わしめるほどであつた。

これらの証言に明らかなように、幕末維新期の様々な対立

構造の枠組みを超えた部分が西郷にはあった。そして西南戦争時に於ける西郷評に関して言えば、それは彼をとりまく者たちの意志であり、西郷は彼らの御輿にまつりあげられたのだとするものが多い。¹⁾しかし、西郷をとりまく者たちを育ててきたのは西郷本人に他ならない。換言すれば、彼らは西郷の生き様を見続けてきた者どもであつた。

本研究は、こういった西郷本人の「仁愛に過ぎ」「犠牲に供す」という性情に関わる諸問題について、西郷の詩文及び当時の西郷評を手がかりに考えていこうというものである。

*

『西郷隆盛全集』²⁾に収録されている西郷詩は全部で一七九首である。さて、西郷の詩作に関しては、岡谷某の次のような証言がある。

「詩は余り感服した詩もないようでござります、何にせよ精神より出づるので……」(「史談会速記録第十一輯」)²⁾

ここに言う「感服した詩」が、どういったものを意味するのかは断言できないが、次の重野安繹の証言と合わせ考えれば、多分に技巧的なものを意味するものと思われる。

「西郷の詩は、拙者が国や大島に居る時分は直してやつた。

拙者と離れてからは、川口良次郎といふ人に詩を直して貰つた。又児玉源之丞天雨にも直して貰つた」(薩藩史研究会編『重野博士史学論文集下巻』²⁾)

またこの証言から、西郷は自らの詩を常にこれらの人物に添削してもらっていたことになり、それは逆に死後にその詩

が本人の意志に関係なく改竄されることは少なかったとも考えられる。本研究では、あくまで西郷の心情は詩中に吐露されているとの立場を取って、以下考証を進めていきたい。そして本稿では西郷にとって重要な時期の詩作から、その時々彼の心情をさぐろうと試みる。その際、重要な時期として選択したのは以下の三期である。

第1期 流刑時

第2期 戊辰前後

第3期 六年政変時

本来ならばここに西南戦争時という項目もあつてしかるべきなのだが、この際の漢詩は全く残されていない(したがって、本論では西南戦争時に於ける西郷には言及しない)。

また詩中に詠み込まれた西郷の心情から、その特徴を浮き彫りにしようとも試みる。今回注目したのは次の二点である。

I 屈原・伯夷・叔斉・張良・韓信

II 理想とする生き方

なお、この節で論じる詩は制作年がはっきりとせず、前者の分類に組み込めないという事情もある。

以下、この順にそつて考証を進めていく。

第1章 流刑時の詩

西郷の流刑は幕末二度に及んだ。一回目は一八五九年(安政六)二月から翌年一月に至るまで奄美大島に流された。こ

れは僧⁽²³⁾月照庇護に関わる罪に因るもので、月照庇護を藩庁が拒むと知るや、月照とともに入水自殺を図る。結果、月照のみ水死し、西郷は九死に一生を得る。その際、西郷が詠んだ大君の 為には 何か惜しからん

薩摩の瀬戸に 身は沈むとも
という和歌は残っているが、はつきりと大島流刑時の作と断定できる漢詩はない。しかしながら、この月照死亡事件が後の西郷に大きな影響を与えたことは十分に考えられ、重野安繹も次のように述べている。

「南洲は此の事あつてより後は、自分が死^{そこ}損^なつて、和尚に気の毒であると云ふ考が、脳髓に留つて居て、終始死を急ぐ心持があつたものと思はれる」(薩藩史研究会編『重野博士史学論文集下巻⁽²⁴⁾』)

ここに重野が言う西郷が生涯持ち続けたという「死を急ぐ心持」が、実際どれほど西郷の中にあつたかは知りようもないが、捨て置くことはできない。これに関して重野は、

「生死を見ること何とも思はない。死を見ること帰するが如しといふ風も、禅学から余程助けて居る」(薩藩史研究会編『重野博士史学論文集下巻⁽²⁵⁾』)

とも言い、西郷の「死を見ること帰するが如し」という心情を禅学の影響としている。同様の言は大久保利通の証言の中にも次のように見られる。

「西郷は從來甚だ感情に敏く、謂はゆる多感の丈夫なり。而して其血性燃ゆる如き熱情を制し来りて、事物に対し枯

木冷灰し去らんと欲し、此に於て禅を学べり。惟^{おも}ふに無為恬澹を以て身を処し、又世を処するは、或は感情過甚の人に益する所あらん。然りと雖も西郷の禅は西郷の望に副はず、反て西郷を意外の地に導き去れり。即ち禅は彼に益せずして彼を害し、妙にも感情を変化し傲世⁽²⁶⁾の氣風を生ぜり。傲世は隠逸と相隨伴す。是れ禅学家の常に免れ難き病なり。西郷も実に此に陥れり。彼れ袖を払うて故山に帰臥せるも、斯病一の誘因と為れるなり。彼れ若し隠逸を悦ばず、飽くまで世俗に混じ、俯仰時務を視て専心国事に従はば、何ぞ官を去るを須^{もち}ひんや。又何ぞ惨劇を演じて奇禍に罹る可けんや」(前島密・市島謙吉編『鴻爪痕⁽²⁷⁾』)

この証言で注目すべきは「禅は彼に益せずして彼を害し、妙にも感情を変化し傲世の氣風を生ぜり。傲世は隠逸と相隨伴す」という部分であり、「傲世の氣風」「隠逸」等の語は、先の「死を急ぐ心持」「死を見ること帰するが如し」とともに西郷理解のキーワードとなろう。

二回目は一八六〇年(文久二)六月から一八六四年(元治元)二月に至るまで、徳之島(文久二・八まで)から沖永良部島へと流された。これは下関待機という島津久光の命に反して京都で活動してしまった事に対する罪であり、西郷の独断による活動が「実に逆心之者」(『島津久光公実紀』「老臣喜入摂津に与へる書⁽²⁸⁾」)と判断された。

その沖永良部流刑時に西郷がいくつかの詩を残している。三首ほど見てみたい。

獄裡氷心甘苦辛 獄裡の氷心 苦辛に甘んじ
辛酸透骨看吾真 辛酸 骨に透つて吾が 真^{まこと} を看る
狂言妄語誰知得 狂言 妄語 誰か知り得ん
仰不愧天況又人 仰いで天に愧ぢず 況や又人をや

(四八)「偶成」

朝蒙恩遇夕焚阮 朝に恩遇を蒙り夕に焚阮せらる

人生浮沈似晦明 人生の浮沈 晦明に似たり

縱不回光葵向日 縱ひ光を回^{めぐ}らさずとも葵は日に向ひ

若無開運意推誠 若し運を開くなくとも意は誠を推す

洛陽知己皆為鬼 洛陽の知己 皆 鬼と為り

南嶼俘囚独窃生 南嶼の俘囚 独り 生を窃む

生死何疑天附与 生死 何ぞ疑はん 天の附与なるを

願留魂魄護皇城 願はくは魂魄を留めて皇城を護らん

(一二二)「獄中有感」

天歩艱難繫獄身 天歩 艱難 繫獄の身

誠心豈莫慙忠臣 誠心 豈に忠臣に慙^はづることなからんや

遙追事跡高山子 遙かに事跡を追う 高山子

自養精神不咎人 自ら精神を養ひて人を咎めず

(一二六)「偶成」

一首目の「仰いで天に愧ぢず」、二首目の「人生の浮沈、

晦明に似たり」などから明白なように、西郷は罪を得た事自体は残晦していない。自らは一首目「氷心(清廉潔白な心)」

の持ち主であり、二首目「誠を推す」のみであるとの詩意である。そしてむしろ流刑なるが故に、自らの職責を全うでき

ない事へのいらだち、すなわち二首目の「洛陽の知己、皆鬼

と為り、南嶼の俘囚、独り生を窃む」が、彼の心を支配し

ていたと見た方がよからう。ここに言う「洛陽の知己」とは、

寺田屋事件(文久二、四)に於て久光の命を受けた同じ薩摩

藩の鎮撫使に上意打ちされて死んでいった有馬新七以下の薩

摩尊攘派をさすものである。重野安繹が「沖ノ永良部にて

別号を屈虫と書いた書状を……」(薩藩史研究会編『重野博士

史学論文集下巻』)と証言しており、西郷自身がこの流刑を

「屈」の状態として受け止めていたことは疑いようがない。

と同時に、かかる現状は三首目「天歩(天運)」のなせるわ

ざでもあり、寛政期に於ける勤王の志士であり、寛政の三奇

人の一人である高山彦九郎を追い求めて「自らの精神を養

い「人を咎め」ることはすまいとも言う。ここで敢えて高山

彦九郎を引くのは、或いは寺田屋事件で死んだ有馬新七が「今

高山彦九郎」とあだ名されていたことにも関連しよう。

また、後に流刑時を回顧して詠んだ次のような詩がある。

世上毀誉輕似塵 世上の毀誉 軽きこと塵に似たり

眼前百事偽耶真 眼前の百事 偽か真か

追思孤島幽囚樂 追思すれば孤島幽囚の樂しみ

不在今人在古人 今人に在らず 古人に在り

(九九)「偶成」

この詩がいつ詠まれたものか定かではないが、この詩の中で流刑當時を「追思すれば孤島幽囚の樂しみ」と回想していることから推せば、この詩が詠まれた時に西郷が置かれてい

た状況はより厳しいものであったに相違なく、前半の「世上の毀誉、軽きこと塵に似たり、眼前の百事、偽か真か」は、その際の彼の苦悩を想像するに余りある。流刑時は、まだ西郷にとつては平穩な時期であつたと言つてよい。そして、「幽囚の楽しみ」という語は、西郷自身を苦しめるものが、或いは西郷にそう思わせているものが「他（者）」であることを同時に想起させる。換言すれば孤独は彼にとつて「楽しみ」の範疇に入り得るものであつた。

第2章 戊辰前後の詩

元治元年、沖永良部より帰還して後、明治初年に至るまでの期間が、西郷にその名を為さしめた時期である。蛤御門の変から二度にわたる長州征伐、薩長連合、王政復古のクーデター、鳥羽伏見の戦い、江戸城の無血開城、戊辰戦争、版籍奉還、廃藩置県。これらすべての維新創業にかかわる諸事に西郷の名が見え隠れする。西郷の生涯に於て、最も彼自身の性情にかなつた輝ける時と言つてよい。以下、この時期の西郷詩を順を追つていくつか見てみたい。

まず、元治元年の第一次長州征伐の頃の作である。

一日貪閑軍務中 一日閑を貪る 軍務の中
 拳鞭奔馬到高雄 鞭を挙げ馬を奔せて高雄に到る
 赤心難競丹楓樹 赤心 競い難し 丹楓の樹
 霜氣侵肌圧髻紅 霜氣 肌を侵し 髻を圧して紅なり

（三）「高雄山」元治元年

ここで自らの心情を「赤心（まごころ）」とし、それを「丹楓」すなわち紅葉に例えていることに注目したい。

この第一次長州征伐の際、勝海舟と会見し、西郷は長州討伐という強硬路線を変更して長州藩の謝罪恭順を求めるようになる。そして奇兵隊等諸隊の屯集地である下関に入る。その際、自ら危地に入つて事態を收拾しようとする心境を詠んだものが次である。

誓入長城不顧身 誓つて長城に入る 身を顧みず
 唯愁皇国説和親 唯だ皇国を愁へて和親を説く
 誓投首作真卿血 誓ひ首を投じて真卿の血と作るとも
 自是多年駭賊人 是より多年 賊人を 駭かさん

（一〇四）「偶成」元治元年

三句目に引かれる顔真卿は、まさにこの時の西郷そのものであつた。唐の安祿山の乱に於て、当時平原太守であつた彼は弟の顔杲卿とともに義兵を挙げて安祿山軍の後方を脅かし、また李希烈のクーデターの際には、そこへ赴いて諭そうとして拘留され殺害されるといふ経歴を持つ。とりわけ後者の李希烈説得の図式に、西郷は自らの長州説得をオーバーラップさせた。

次に戊辰戦争終結後の詩をいくつか見てみたい。まず戊辰戦争から帰郷して明治元年から二年あたりの頃の作である。

柴門曲臂絶逢迎 柴門 臂を曲げて逢迎を絶つ
 夢幻利名何足争 夢幻の利名 何ぞ争ふに足らん

貧極良妻未言醜 貧極まつて良妻未だ醜を言はず

時來牲牷應遭烹 時來らば 牲・牷・應に烹に遭ふべし

願遁山野畏天意 願はくは山野に遁れて天意を畏れ

飽易榮枯知世情 飽くまで榮枯を易へて世情を知らん

世念已消諸念息 世念 已に消えて諸念息み

烟霞泉石滿襟清 烟霞泉石 襟に満ちて清し

(五三「失題」明治元、二年)

二句目の「夢幻の利名、何ぞ争ふに足らん」は、西郷が他の所謂維新の功臣とは一線を画していたことの一つのあらわれであろう。たとえば『西郷南洲遺訓(以下『遺訓』と略記)』に於て、彼自身、當時を次のように述懐している。

「万民の上に位する者、己れを慎み、品行を正くし、驕奢を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して人民の標準となり、下民其の勤勞を氣の毒に思ふ様ならでは、政令は行はれ難し。然るに草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文^{かざ}り、美妾を抱へ、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷^{まじき}也。今と成りては、戊辰の義戦も偏^{ひとへ}に私を営みたる姿に成り行き、天下に對し戦死者に對して面目無きぞとて、頻りに涙を催されける」(『遺訓』四)

西郷はここで他の維新の功臣たちを「偏^{ひとへ}に私を営みたる姿に成り行き」と言う。その前文の「草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文^{かざ}り、美妾を抱へ、蓄財を謀り」とは、まさに彼らの姿なのである。西郷が理想とする国事にかかわる者のあるべき姿とは、これとは全く逆の

「命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり。……道に立ちたる人ならでは彼の氣象は出ぬ也」(『遺訓』三〇)

であつた。しかし、これら「私を営みたる」者たちに對し、西郷が何をしたのかといえれば先の「失題」の一句目に見える「逢迎を絶つ」のみで、何か事を為したというわけではない。これは伊藤博文が

「大人物ではあつたが寧ろ創業的の豪傑で守成的の人とは云へない」(中央新聞社編『伊藤侯井上伯爵山県侯元勳談⁽³⁷⁾』)と言つた如く、彼が「創業の臣」にすぎなかつたことの証左ともなう。また先の四句目「時來らば、牲牷、應に烹に遭ふべし」は、直後の西郷を暗示するフレーズであり、次の明治四年、朝命に應じて上京する際のものに関わってくる。前年一二月、勅使岩倉・副使大久保が来鹿し、西郷への出仕を促す。そして、久光の許可を得てからの上京である。その際に詠まれたものが次である。

去来朝野似貪名 朝野に去來するは名を貪るに似たり

竄謫余生不欲榮 竄謫の余生 榮を欲せず

小量応為莊子笑 小量 應に莊子の笑ひと為るべし

犧牛繫杙待晨烹 犧牛 杙に繫がれて晨烹を待つ

(三二「失題」明治四年)

上京することが自らの本意ではないことが全編にわたって示されている。西郷にとってそれは夢幻の「名を貪る」行為

に他ならず、「榮を欲」しない自分が上京するということは、殺される日を待つ生け贄の牛に等しいという詩意である。先の「牲牷」とともに、この「犧牛」も西郷の本意とは異なる行動を強いられる際のフレーズである。三句目に見える「応に莊子の笑ひと為るべし」とは、この「犧牛」が『莊子』列禦寇篇の犧牛³寓話を踏まえたものであるからに他ならない。すなわち毅然として招聘を断つた莊子は、きつと断り切れなかった自分の「少量（度量の小ささ）」を笑うに違いないという詩意である。

しかし西郷の本意に反して、同年六月には正三位・参議となり、七月には廃藩置県を断行。そして十一月には後の明治六年政変のきっかけともなる岩倉・大久保・木戸らの欧米渡航となる。翌五年七月には陸軍元帥兼参議、近衛都督となり、十一月に久光より一四箇条にわたる非難書がつきつけられる。西郷の思いとは全てに於て逆行していると言えよう。

第3章 明治六年以後の詩

次に明治六年政変、所謂征韓論論争に於て西郷が敗れ、下野した際の詩を時間の流れにそって見てみたい。

まず、六年八月、遣韓大使の内命を受け、韓国出発を待ち望む際のものである。

酷吏去来秋氣清 酷吏 去り来つて 秋氣清く
鷄林城畔逐涼行 鷄林城畔 涼を逐^おつて行く、

須比蘇武歲寒操 須べからく比すべし 蘇武歲寒の操

応擬真卿身後名 応に擬すべし 真卿身後の名

欲告不言遺子訓 告げんと欲して言はず 遺子の訓³

雖離難忘旧朋盟 離ると雖も忘れ難し 旧朋の盟

胡天紅葉凋零日 胡天の紅葉 凋零の日

遙拝雲房霜劍橫 遙かに雲房を拝すれば霜劍横たはる

(四七「蒙使朝鮮国之命」明治六年八月)

三、四句目に蘇武・顔真卿の名が見える。蘇武は前漢武帝の時に、匈奴に抑留され一九年後に帰国した経歴を持ち、顔真卿は先にも示したように、李希烈が背いた時に勅を奉じて行つて彼を諭そうとし、逆に脅迫されるが屈することなく殺された人物である。すなわち蘇武は抑留を、顔真卿は死を示すものとして使用されており、この時の西郷の渡韓の覚悟を代弁するモチーフとなっている。加えて、自らの心情(丹心)を「紅葉」に比することの多かつた西郷が、ここで「紅葉凋零」⁴と詠んで、紅葉の落ちる様を示していることにも着目したい。次は同年一〇月、遣使論が破れて下野した際のものである。

独不適時情 独り時情に適せず

豈聴欽笑声 豈に欽笑の声を聴かんや

雪差論戰略 羞^{はぢ}を雪^{すす}がんとして戰略を論ずれば

忘義唱和平 義を忘れて和平を唱ふ

秦檜多遺類 秦檜 遺類多く

武公難再生 武公 再生し難し

正邪今那定 正邪 今 那ぞ定めん

後世必知清 後世 必ず清を知らん

(一三五「辞闕」明治六年一〇月)

一句目の「独り時情に適せず」は、この時の西郷の心情を一言であらわしたものとと言える。もともと征韓論は明治元年末より岩倉・木戸といった、今回征韓反対派の中心となった者たちが口火をきったものであった。西郷の使節派遣論は、その流れを汲んだものでもあり、その岩倉と木戸によつて反対されたということは、西郷にとつて納得できないものであったろう。このことは五、六句目に宋の高宗時代の宰相秦檜と武將岳飛が引かれていることから明らかである。金と対立していた宋の時代、宰相秦檜は高宗の意も受けて、主戦派の武將岳飛が金に勝つことを喜ばず、岳飛を殺すことを条件に金と和睦し、高宗に讒言して岳飛を獄死させた。自らを武公(岳飛)に喩えての心情の吐露である。そして、今はいずれが「正」であり「邪」であるのか判別し難い(「正邪、今、那ぞ定めん」)が、後の人々は必ず自分を「清」として認めてくれるであろうとする。また冒頭の「独り時情に適せず」のフレーズは『楚辞』漁父辞の「聖人は物に凝滞せずして、能く世と推移す」に反論した屈原の生き様を想起させる。すなわち彼自身が自らの生き方を改めて時流に合致させるということは少なくともなかったように思われる。彼が最も輝いていた元治元年から明治初年までは彼の性情と時流がたまたま合致していたと見るべきであろう。西郷が屈原を意識していたことは第1章の第2節のIで引用した「偶成」に「離騷」

を引くことから明らかであり、ここに彼の屈原的自己意識を見出そうとすることはたやすい。

次は下野して鹿児島に帰り着いた際のものである。

我家松籟洗塵縁 我が家の松籟 塵縁を洗ひ

満耳清風身欲仙 満耳の清風 身 仙ならんと欲す

謬作京華名利客 謬りて京華名利の客と作り

斯声不聞已三年 斯の声 聞かざること已に三年

(一八「偶成」明治六年一月)

ここでは、策を弄して西郷の渡韓を阻んだ岩倉・大久保・木戸らを「塵」と言い、ここ数年の東京での自分を「謬りて京華名利の客と作り」と表現している。明治初年の帰省中の詩に見えた「夢幻の利名、何ぞ争ふに足らん」「牲牷、応に烹に遭ふべし」「犧牛、杙に繋がれて晨烹を待つ」と呼応する詩情である。そして中央の喧騒から逃れ得た西郷を待つものは「満耳の清風」であり、「身、仙ならんと欲す」という本来西郷が求めていたであろう姿を詠んでいる。また、

山老元難滞帝京 山老 元より帝京に滞まり難く

絃声車響夢魂驚 絃声車響に夢魂驚く

垢塵不耐衣裳汚 垢塵 衣裳の汚るるに耐へず

村舍避来身世清 村舍 避け来りて身世清し

(六四「投村家喜而賦」明治六年)

には「垢塵」という表現が見え、先の「塵」とともに、「汚るるに耐へず」とする西郷の政府に対する意識を見て取ることができる。もちろんこの「衣裳」は西郷の「氷心(清廉

潔白な心」に他ならない。彼が強く望むものはあくまで「身世清し」であつた。そして同年末に詠んだ詩では、

白髮衰顔非所意 白髮 衰顔 意とする所に非ず
 壮心横剣愧無勲 壮心 剣を横たへて勲なきを愧づ

百千窮鬼吾何畏 百千の窮鬼 吾何ぞ畏れん
 脱出人間虎豹群 脱出す 人間虎豹の群

(一四二「除夜」明治六年)

と言ひ、ここでは渡韓に関して「勲なきを愧づ」と回顧した上で、故郷への帰還を「人間虎豹の群」からの脱出と位置づけている。しかし翌年春には

塵世逃官又遯名 塵世 官を逃れ又名を遯れ

偏怡造化自然情 偏に怡ぶ 造化自然の情

閑中有味春窓夢 閑中 味あり 春窓の夢

呼覚曉驚三両声 呼び覚す 曉驚三両声

(九六「偶成」明治七年)

と詠んでおり、「塵世、官を逃れ又名を遯れ、偏に怡ぶ、造化自然の情」に加えて、「閑中 味あり」の語は、西郷が明治二、三年当時の「逢迎を絶」っていた頃の心境にたちもどつてゐることが看取できる。

以下の二句は翌七年及び七八年の作とされる詩である。

半生行路咲吾非 半生の行路 吾が非を咲ひ

瀟洒清風入曉幃 瀟洒 酒たる清風 曉幃に入る

請看疎烟短牆處 請ふ看よ 疎烟短牆の處

紅塵離去少炎威 紅塵離れ去つて 炎威少なきを

(一四六「偶成」明治七年)

官途艱險幾年勞 官途 艱險 幾年か勞す

恰似輕舟風怒号 恰も似たり 輕舟 風の怒号するに

昨日非於鋤下覺 昨日の非は鋤下に於て覺り

半生齡可卷中逃 半生の齡は卷中に逃るべし

山遊無累真狸兎 山遊 累なし 真に狸兎

獬隱有當唯銃斃 獬隱 當あり 唯だ銃斃

誰識滿襟清賞足 誰か識らん 滿襟清賞足り

峰頭閑月万尋高 峰頭の閑月 万尋高きを

(二三「偶成」明治七八年)

それまでの風に翻弄される「輕舟」の如き自らの非を笑い、「紅塵」「炎威」から逃れ去つて田舎でのんびりと生活することの楽しさを詠む前者、荒波に翻弄される小舟に自らを例え、現在の「山遊」「獬隱」を至上とする後者である。詩想としては、ほぼ同一のものと考えてよからう。

以上、流刑時から明治六年政変時までの詩をいくつか見てきたが、ここに一貫して感じられるのは西郷の対立者(幕府・新政府)を「濁」とし、自らを「清・静」とするイメージであろう。そして、自らの胸中については、さらに「紅葉」「仙」「閑」など様々な広がりをもて表現がなされている。

第4章 屈原・伯夷・叔齊・張良・韓信

歴史上の人物や事柄を詩中に詠み込むという行為は、自ら

をそこに投影することであることが多い。たとえば雲井龍雄が詩中に於て自らを管仲や藺相如、張良にたとえたことは以前論じた。屈指の政治家たらんとした彼の心情の吐露である。西郷の場合も、先章までに引用した詩中で、自らを顔真卿・蘇武・岳飛などに比していた。本章では、これら意外に西郷が自らを投影していた中国古典上の人物を提示してみたい。⁽⁴²⁾まず南島流罪中の作で、自らを屈原とダブルイメージで捉えたものである。

雨帶斜風叩敗紗 雨は斜風を帯びて敗紗を叩き

子規啼血訴冤譚 子規 血に啼き冤を訴へて 譚^{かまひす}

今宵吟誦離騷賦 今宵 吟誦す 離騷の賦

南竄愁懷百倍加 南竄の愁懷 百倍加はる

(一一「偶成」)

中国に於ける流刑者として、最も古く且つ著名な者は、戦国末期の楚の懷王・頃襄王に仕えた賦家屈原であろう。前漢初期には既に彼の名は悲運の流刑者としてのイメージが固まり、たとえば前漢文帝期の賈誼は左遷された際に、自らを屈原にオーバースラップさせ「弔屈原賦」を詠んでいる。ここでは二句目に「子^{ホトトギス}規」を登場させ、吐血しながら自らの無実を訴える様を詠んで、三句目の屈原の「離騷の賦」と対応させている。

また、次のように自らを伯夷・叔斉に例えた詩も存する。

世間多少失天真 世間 多少 天真を失ひ

貧富廉貪未了因 貧富廉貪 未だ因を了せず

請看摘薇夷叔操 請ふ看よ 薇^{わらび}を摘みし夷叔の操
貴於值十五城珍 値十五城の珍よりも貴し

(九八「詠史」)

殷王朝末期の高潔の隱士である伯夷・叔斉も「退く者」としてのイメージであり、帰郷時の西郷とオーバースラップする。通常、周の武王に殷の紂王討伐の非を訴え、入れられぬと見るや首陽山に入り餓死した故事が有名であるが、伯夷・叔斉の兄弟は、その父孤竹君との間に次のようなエピソードを持つ。すなわち、孤竹君は自らの第三子叔斉に君位継承を依頼するのだが、孤竹君の死後、叔斉は長兄伯夷をさしおいて君位を継承することを拒否。そして、当の伯夷も父の遺志をまげて継承することを拒否し、兄弟ともども亡命し、周の西伯(文王)のもとへ赴く。かかる伯夷・叔斉の行状の評価は、西郷があくまで先君斉彬の遺志を継がんとして行動しようとしたことと無関係ではあるまい。また一句目に見える「世間、多少、天真を失ひ」というフレーズも注目に値しよう。「天真」を失っているのはあくまで「世間」であり、自らは「操(高節)」を保っているという自負心がここに読み取れる。加えてその高節が『史記』藺相如伝などに見られる「値十五城の珍(和氏の璧)」と比較されているということは、西郷の価値観が強烈に示されていると思われる。

続く二首は漢の高祖劉邦の二人の功臣、張良と韓信を詠んだものである。ともに前漢王朝創業の功臣でありながら、張良は天寿を全うし、韓信は逆賊として誅殺され、明暗を分け

る。まず、張良を詠んだものである。

守哲無如鈍 哲を守るは鈍に如くはなく

風容似女仙 風容 女仙に似たり

胸中何物在 胸中 何物か在る

圯下枕書眠 圯下 書を枕にして眠る

(七〇「題子房図」)

一句目の「哲を守るは鈍に如くはなく」は、張良を鑑とした自らへの戒めと取るべきであろう。とりわけ明治以降の西郷の生き方は、ここに言う「鈍に如くはなし」と無関係であるとは思えない。事実張良は漢王朝成立後は一線から退き、半ば隠棲したが如き様相を呈する。

これに対し、非業の最期を遂げたのが「またくぐり」の逸話で知られる大將軍韓信である。

盛名令終少 盛名 終わりを令くするは少なく

功遂竟淪亡 功遂げて竟に淪亡す

恠底勝間志 恠しむ底ぞ勝間の志

封王忽自忘 王に封ぜられて忽ち自ら忘る

(一〇一「題韓信出胯下図」明治二、三年)

「盛名」を得ることの危うさ。それに奢り「勝間の志」を見失って「淪亡(滅びる)」してしまつた韓信の轍を踏まぬよう、自らを戒めたものと考えてよからう。明治二、三年の頃の詩であることを考慮に入れれば、第2章で言及した「夢幻の利名」を争う他の功臣たちを痛罵したものと考えられ、それが強い自らへの戒めともなっている。

この張良・韓信を詠み込んだ二首に関連して、次の「才子」を論ずる詩を見てみたい。

才子元来多過事 才子 元来 多く事を過る

議論畢竟世無功 議論 畢竟 世に功なし

誰知默默不言裡 誰か知らん 默默不言の裡

山是青青花是紅 山は是れ青青 花は是れ紅なるを

(五一「偶感」)

この詩の一句目に見える「才子、元来、多く事を過る」は明らかに先の韓信の姿に、また黙々として不言をつらぬこうとする意志は張良の「鈍に如くはなし」と連動する。ここに見える「才」という語は、「鈍」とともに西郷理解の一つのキーワードとなろう。『遺訓』にも次のような語がある。

「今の人、才識有れば事業は心次第に成さるるものと思へ共、才に任せて為す事は、危くして見て居られぬものぞ。体有りてこそ用は行はるるなり」(『遺訓』三九)

張良たらんとし、韓信を非とした西郷の拠り所がまさにここにあると考えられる。そして、これらの詠史詩を見た時、西郷が心の有り様を問題として持ち続けていたことは疑いなく、これについては彼自身

「総じて人は己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るるぞ。…事業を創起する人、其事大抵十に七八迄は能く成し得れ共、残り二つを終る迄成し得る人の希れなるは、…功立ち名顯はるるに随ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼戒慎の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、其成し得たる

事業を負み、苟も我が事を仕遂んとて、まづき仕事に陥り、終に敗るるものにて、皆な自ら招く也」(『遺訓』二二)と述べている。次章でこの問題について触れてみたい。

第5章 己と心と

先章までに考証を及ぼした西郷詩を改めて見たとき、いくつかのキーワードが一つのまとまりを持つものであることに気づく。すなわちそれは、「死を急ぐ心持」「死を見ること帰するが如し」「生死何ぞ疑はん」「自ら精神を養ひ」「幽囚の樂しみ」「孤独」「赤心」「丹楓」「氷心」「塵」「垢塵」「塵世」「清」「鈍」「才」などの諸語である。これらを以て、これまで見てきた西郷という人物を描写しようとするれば、「塵」「垢塵」「塵世」に對立する自分は、「丹楓」の如き「赤心」、「清」なる「氷心」の持ち主であるが故に、「孤独」にならざるを得ない。しかし「死を見ること帰するが如く」「生死」を疑うこともない「精神」を養い、「鈍」を悟った自分にとって、それも「樂しみ」である、ということになろうか。

これに関連して、同時代人たちの西郷に対するコメントの中によく出てくるのが彼の無欲ぶりを評するものである。

「南洲翁は誰が教へたともなく無欲である」(徳富猪一郎

『西郷南洲先生』)

「彼の行為の何処にも野心的な処がない。出世を目的として行動した形跡がない」(武者小路実篤『西郷隆盛』)

「彼ほど人生の欲望の少ない人を知らない」(内村鑑三『代表的日本人』)

かかる評価は、同時に西郷が自ら言う「赤心」と相關するものと考えてよい。そしてこれについては西郷自身、強く意識していたようであり、『遺訓』にも次のような文が見える。

「廟堂に立ちて大政を為すは天道を行ふものなれば、^{いささ}些

とも私を挟^{さしはさ}みては済まぬもの也。いかにも心を公平に操り、正道を蹈み、広く賢人を選挙し、能く其職に任ふる人を挙げて政柄を執らしむるは、即ち天意也」(『遺訓』一)

「己れを愛するは善からぬことの第一也」(『遺訓』二六)

ここに「己」が問題となり、そして西郷を論ずる場合に欠かせない「敬天愛人」というテーゼが浮上することになる。

「敬天愛人」については内村鑑三が

「『敬天、愛人』は、彼の全人生觀の要約であつた」(内村鑑三『代表的日本人』)

と言うが如く、西郷にとって最も重要なテーゼであることは言うまでもない。西郷本人の言をかりれば、

「道は天地自然の道なるゆゑ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ」(『遺訓』二一)

「道は天地自然の物にして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、

我を愛する心を以て人を愛する也」(『遺訓』二四)

ということになる。

では以下、西郷が詩の中で如何なる生き方を理想としてい

たか、また自らに、若者たちに何を課していたのかを見、彼の心情を明らかにしてみる。まず自らの心を詠んだものから見てみたい。

我有千系髮 我に千系の髪あり

鈍鈍黒於漆 鈍^{さんさん}として漆よりも黒し

我有一片心 我に一片の心あり

皓皓白於雪 皓皓として雪よりも白し

我髮猶可斷 我が髪は猶ほ断つべし

我心不可截 我が心は截つべからず

(一九「失題」)

何者にも汚されることのない自らの「皓皓」たる心の提示である。ことさらに自らの「皓皓」たる心の提示は、「我が心は截つべからず」と合わせ考えれば、自尊心のあらわれと言ふよりは、むしろ汚されまいとする信念の表象と言えよう。この見方は、次の一首に於てもあてはまる。

座窺古今誦陳編 座して古今を窺ひ陳編を誦ずれば

富貴如雲日幾遷 富貴雲の如し 日に幾たびか遷る

人不知吾何慍有 人の吾を知らざるに何の慍^いることか有らん

一衣一鉢任天然 一衣一鉢 天然に任せん

(五〇「失題」)

「人の吾を知らざるに何の慍^いることか有らん」は、当時西郷を取り巻く人々が、西郷本人の心底を全く理解していなかったことの裏返しと考えた方がよからう。すなわち、これ

らの「自」「己」は、「他」とのかかわりの中で詠まれており、それは対立するものとして描かれている。たとえば次の一首はより明確に自と他の断絶を示すものと言える。

深遮塵世樹陰清 深く塵世を遮^{さへ}つて樹陰清く

幽鳥為誰窓外鳴 幽鳥 誰が為に窓外に鳴く

最喜山中免官賦 最も喜ぶ 山中 官賦を免れ

曾無俗吏叩柴門 曾て俗吏の柴門を叩くなきを

(九三「偶成」)

ここで「他」に属するのは「塵世」「官賦」「俗吏」であり、「自」に属するのは「深」「清」「幽」である。また次の詩も同様である。

平生忠憤氣 平生 忠憤の氣

磅礴滿寰宇 磅礴^{ほうはく}として寰宇^{かんう}に満つ

自得安心法 自得す 安心の法

成敗守吾愚 成敗 吾が愚を守る

(一五四「偶成」)

四句目の「成敗、吾が愚を守る」は、成功失敗を眼中におかず、自らの愚直を全うするとの意であり、先に示した「鈍に如くはなし」とともに、西郷の立場を示すものと言える。

そして西郷のこの生き方は、つきつめれば他者とのかけひきなど必要としない己一人の世界の希求へとつながっていく。

この視点に立てば、たとえば『遺訓』に見える

「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを尽て人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねべし」(『遺

訓『二五』

という記述などは「天を相手にする」ことの主張と見るよりは、「人を相手にする」ことへの嫌悪と見て取った方が妥当のように思われる。また、

山中独楽有誰争 山中の独楽 誰あつてか争はん
 晚酌無魚芹作羹 晚酌 魚なく 芹を羹と作す
 自隔人声虚澹極 自ずから人声を隔てて虚澹極まり
 清風明月有余贏 清風 明月 余贏あり

(六三「山中独楽」)

駆犬衝雲独自攀 犬を駆り雲を衝いて独り自ら攀じり

豪然長嘯断峰間 豪然 長嘯す 断峰の間
 請看世上人心險 請ふ 看よ 世上人心の險
 涉歴艱於山路艱 涉歴 山路の艱よりも艱なり

(三四「山行」明治二、三年)

前者の「山中の独楽、誰あつてか争はん」、後者の「請ふ看よ、世上人心の險、涉歴、山路の艱よりも艱なり」も、いずれも己一人の世界を詠じたものに他ならない。

これについては徳富蘇峰の「南洲翁は情の人であり、徳の人であるが、度量はあなたの方の思ふ程大きな度量ぢやない。さう清濁併せ呑む人ぢやない。清は呑むけれども、濁は嫌ひ、……」(『西郷南洲先生』)という証言もその証左となる。

武者小路実篤は小説『西郷隆盛』の中で「敗れて死んだと言ふよりは、自分で死を安じて迎へた感じだ」(『西郷隆盛』)と言っている。

西郷はそこに他者の存在しない、真の「閑中の楽しみ」を求めたのであろうか。

或いは、彼は「小量」たる「犧牛」であり、明治という怒風に翻弄された「輕舟」にすぎなかったのであろうか。とすれば「敬天愛人」というテーゼも、むしろ人間関係に翻弄され続けた西郷の处世の中から生まれた自らへの戒めなのかもしれない。

おわりに

『東京日々新聞(以下『日々』と略記)』に於て反乱が確報として掲載されるのは二月二〇日付であった。それ以前の判然としない間は、暴挙の真偽、暴挙の担い手が、確証なしとされながらも掲載されている。とりわけ担い手が私学校党であることは動かないのだが、それに鹿児島全県の士族が荷担しているのか、そして西郷が動いているのかが議論の的となっている。ただし『日々』は最後まで西郷擁護の立場を取っている。その例を示してみたい。

まず西郷が神風連の乱、秋月の乱に呼応しようとする者たちへの訓告を告げるエピソードの掲載である。

「昨年十月下旬、熊本暴動、続て山口県騒擾の警報あるや、当地にての伝聞は実に天下大乱に至るべきの趣也。此時、西郷氏、私塾生徒を集めて告て曰「人心の向背は時勢の順逆によりて決す。一とたび方向を謬れば、悔とも追ふ可ら

ず。慎まざればある可らず。今や九州各藩の士族及び長州前原一誠の徒、朝憲を蔑棄し私憤を逞せんとす。天下の人心一たび之に靡くときは、実に国家の一大事也。県官を暴殺するが如きは、大丈夫の恥る所なり。方今、朝家の政令一も道理に背けるものなし。何ぞ不平を鳴らす可けん。今の時に方りては、鹿児島士族は上京して暴徒を芟除し、上は朝廷を護し奉り、下は万姓を安んじ、更に退て身耕力食し、以て臣子の本分を尽す可きなり」と。是に於て左袒する者一万余人、……『日々』一月二六日)

度重なる不平士族の乱にあつても、『日々』ですら西郷のクーデターはあるまいという立場を取る。しかし、西郷のクーデターが発覚した後、二月二三日付『日々』に西郷を評して次のように言っている。

「西郷の西郷たる所以の者は、何^{いづ}に在る。……氣宇凜乎、廟堂の高に居ては、則ち其民を忘れず、江湖の遠に居ては、則ち其君を忘れず。説客蒯通の背^はを見るあるも肯て淮陰(韓信)の不逞を学ばず、豎子韓(信)・彭(越)の兵を挙るあるも肯^あて鯨布の狂愚に傲^なはず。実に人臣の大節あるを以てなり。今、輒^{すな}ち叛人となる西郷、既に西郷ならず。諸君は猶西郷ならざるの西郷に畏服せんと欲するか」

(『日々』二月二三日)

ここに西郷は本来説客蒯通の言葉に自分を見失ってしまった韓信のような人物ではなかったはずだとの悲痛な思いが吐露されている。「盛名」に自らを見失った者として韓信を否

定し、さらに韓信の如き「才」を「多く事を過る」ものとして危険視した西郷が、韓信に比されるとは、実に皮肉な結末と言わざるを得ない。

―註―

(1)「幕末・明治期の知識人―変動期の知識人研究への視角―」(渭陽会編『東洋の知識人―士大夫・文人・漢学者―』(朋友書店)所収)

(2)雲井龍雄に關しては「雲井龍雄研究序説―慷慨と隱逸をめぐって―」(徳島大学教養部紀要人文・社会科学28)、「自由民権運動下の雲井龍雄の側面―『土陽新聞』掲載記事をめぐって―(上下)」(徳島大学国語国文学6・7)。高杉晋作に關しては「高杉晋作の詩想―「狂」と「偷生」をめぐって―」(言語文化研究徳島大学総合 科学部5)。

(3)生を偷^{ぬす}む。志士たちが作詩の際に好んで用いたモチーフの一つで、何かを為さねばならない時に、何を為すこともなく漫然と生をむさばることを言う。

(4)『周易』遯卦の九五。志を正しく保つていれば隱遁することができるとの意。

(5)『論語』微子に見える「狂接輿」説話に見える「鳳よ鳳よ何ぞ徳の衰えたる…」という詩を典故とする。

(6)山川浩(一八四五―九八)。会津藩士。幕末は京都守護職となつた松平容保に随従し、維新以降は斗南権大参事として開拓と家臣団統率にあたる。後、陸軍省に入り、佐賀

の乱や西南戦争に参加した。なお以下の和歌は会津若松市内の博物館に所蔵された軸による。

(7) 牧野伸顕(一八六一—一九四九)。薩摩藩士。大久保利通の次男であり、岩倉具視らの遣外使節にも同行。後に西園寺内閣の一次の文相、二次の農商相、山本内閣の外相などを歴任した。

(8) 西郷隆盛全集編集委員会編『西郷隆盛全集(全六巻)』(大和書房、以下『全集』と略記) 第六巻二三二頁。

(9) 大町桂月(一八六九—一九二五)。高知出身。評論家、随筆家。明治二九年、帝国大学国文科を卒業し、以降文筆業に入った。

(10) 『全集』第六巻七九頁。

(11) 重野安繹(一八二七—一九一〇)。薩摩藩士。明治期の歴史学者、漢学者。藩校造士館で学んだ後、江戸の昌平黉に進む。維新後は文部省・太政官に出仕し、修史局の中心となって『大日本編年史』の編纂の準備に従った。

(12) 渋沢栄一(一八四〇—一九三二)。武蔵国の豪農の家に生まれ、幕末、一時尊王攘夷運動の志士であったが、一八六四年、一橋家に仕え、後幕臣となり、遣欧使節の一員として渡欧。維新後は大蔵省官吏となり、以後は財界に関与していった。

(13) 講談社学術文庫『明治十年丁丑公論』

(14) 『全集』第六巻一二七頁。

(15) 『全集』第六巻一四五頁。

(16) 福地源一郎(一八四一—一九〇六)。明治の新聞記者、文学者。長崎の医師の家に生まれ、漢学・蘭学・英学を修め、幕末は通訳として幕府に仕える。二回にわたって幕府使節として渡欧した。維新後は大蔵省に出仕し、財政制度調査のため渡米。岩倉使節団にも随行。帰国後『東京日日新聞』に主筆として入社。後半生は文人として生きた。

(17) 『全集』第六巻二二六頁。

(18) この他、土佐立志社の機関誌『海南新誌』『土陽新聞』などにおいても西郷を擁護する論説が展開されている。これについては註2既出の拙稿「自由民権運動下の雲井龍雄の側面(下)」において詳細に論じた。

(19) たとえば大久保利通や牧野伸顕、山川健次郎の以下ような証言がある。

「(大久保の伊藤博文宛書簡) 此度の暴挙は、必桐野以下班々之輩におひて、則決せしに疑なく、……」(『回顧録』、『全集』第六巻二三五頁)

「(高橋新吉が) 当地の状況は想像以上に陰悪で、桐野らが中心になって過激派の勢力が盛んでどうにも手の付けようがないと言って来たが、……」(『回顧録』、『全集』第六巻二三八頁)

「西郷に熊吉という忠僕があつて、その熊吉が菊次郎に話したところによると、征韓論が決裂してから数日後に西郷が家に帰って……(熊吉が) これからのことはどうなるのでしょうかと聞いたところが、西郷は「実に困る。桐野など

がなかなか手に余る。何とかしようとして、初め士族を率いて北海道に行くことを考え、次ぎに征韓論を主張したが、これもうまく行かぬ。いよいよ仕方がないから鹿児島に引込む他ない」と言ったということである(『回顧録』、『全集』第六卷二三九頁)

「(西南戦争時の西郷) 恐らく児分に昇ぎあげられてどうにも始末がつかなくなつたものであらうと思ひます」(『日本及日本人』所収東寧生「山川健次郎博士の南洲観」、『全集』第六卷二六五頁)

(20)『全集』第四卷。

(21)『全集』第六卷五四頁。

(22)『全集』第六卷一三六頁。

(23)月照(一八一三〜五八)。讃岐出身の町医者の子。梅田雲浜や頼三樹三郎らと交わり攘夷活動を行った。

(24)『全集』第六卷一二〇頁。

(25)『全集』第六卷一三四頁。

(26)世の中の人を軽く見ること。

(27)『全集』第六卷六三頁。

(28)『全集』第六卷一五〇頁。

(29)この番号は『全集』に付されたものである。

(30)一八六二年(文久二)四月二三日、京都伏見の寺田屋において、薩摩藩士有馬新七ほか尊攘激派が薩摩藩兵に被害された事件。新七らが久光入京を機に挙兵し、幕府の改革を実現しようとしたものを、久光は暴発として捉え抑えた。

(31)『全集』第六卷一二一頁。

(32)『周易』繫辭伝の「尺蠖の伸ぶるは其の能く屈するに因る」に基づく。註2既出の拙稿「雲井龍雄研究序説」に於ても言及しているが、志士らが敗者となり、次なる「伸」を期する際に詩中のモチーフとして使用した。

(33)高山彦九郎(一七四七〜九三)。江戸後期の勤王家。現群馬県太田市の生まれ。忠孝仁義の人を訪ねて諸国を遊歴した。また高山に藩生君平・林子平を加えて寛政の三奇人という。筆者は太田市の高山彦九郎記念館を訪問した際、記念館の職員の方々にお世話になった。深く感謝する次第である。

(34)京都の西北にある山。

(35)「丹楓」というモチーフは、慶応二年十月十五日、鹿児島から小松帯刀と共に薩摩の汽船三邦丸で上京の途上船中で詠んだ詩中にも見える。

連歳投危十月天 連歳 危きに投ず 十月の天

黒烟南北飛火船 黒烟 南北 火船を飛ばす

朝威不奮縦奸計 朝威奮はず奸計を 縦ほしにす

身作丹楓帝辺散 身は丹楓と作なつて帝辺に散らん

(一七二)「慶応丙寅十月上京船中作」(慶応二年十月)

(36)『西郷南洲遺訓』(岩波文庫)を参照した。

(37)『全集』第六卷二五頁。

(38)『莊子』列禦寇篇に「或ひと莊子を聘せんとす。莊子、其の使に応へて曰く「子、夫の犢牛を見るか。衣するに文

續を以てし、食はすに芻菽を以てす。其の牽かれて太廟に入るに及びて、孤犢と為らんと欲すと雖も、其れ得べけんや」とある。

(39)「告げんと欲して言はず遺子の訓」は、楠木正成の子供には何の遺訓も遺さないという遺訓を踏まえる。

(40)おとろえ、落ちぶれるさま。

(41)さっぱりして清らかなさま。

(42)中国古典以外で最も頻度の高いものは、所謂建武の中興、すなわち後醍醐天皇と楠木正成を中心とする者たちを詠んだものである。以下、簡単にいくつか提示しておく。

まず、楠木正成の遺臣恩地左近が、正成の命で正行を河内の故郷に連れ帰ったために、湊川の戦に参加できなかった事件を詠んだものである。

一戦食生非懼死 一戦 生を食る 死を懼るるに非ず
名分大義莫間然 名分 大義 間然するなし

幾回控計寒奸肝 幾回か計を控いて奸肝を寒からしむ
成敗不論高節堅 成敗 論ぜず 高節堅し

(六「詠恩地左近」)

次に、後醍醐天皇救済のために奔走した児島高德を詠んだもの。

吁嗟雖莫范蠡功 吁嗟 范蠡の功なしと雖も
先命投機志気雄 命に先じて機に投ずる志気雄なり
十字血痕花色在 十字の血痕 花色在り
龍顔一笑認孤忠 龍顔 一笑 孤忠を認む

(九「児島高德」)

次は楠木正成を詠んだものである。

奇策明疇不可謨 奇策 明疇 謨るべからず
正勤王事は真儒 正に王事に勤むる 是れ真儒
懷君一死七生語 懷ふ 君が一死七生の語
抱此忠魂今在無 此の忠魂を抱くもの 今 在りやなし

(二七「題楠公図」)

(43)『全集』第六卷一八四頁。

(44)『全集』第六卷二五七頁。

(45)「敬天愛人」に関して、田中惣五郎が『大西郷の人と思想』(昭和一八年、今日の問題社刊)の中で述べている部分は特筆に値する。彼はまず

「西郷にとつての敬天とは、為政者としての士族が政治にたづさはる際に持つ心構へであつたと思はれる。武士出身の西郷の思想は、士と農とはおのづから別のものであり、農は愛すべく、士は敬むべしとするにあり、士の政に携はることを飽くまで肯定したのであり、ただその際の為政家の態度は、あくまで私を棄てて公につき、天に則してこれを行ふべしとするにあつた」

と言ひ、西郷の言う「敬天」とは「私を棄てて公につき、天に則してこれを行」うものであつたとしながらも、そこには士農の別があつたとし、この点に関してさらに

「西郷の思想は、封建的なものと近代的なものとの混合に

あり、四民平等の代りに、士の平等と民の平等とを良心的に計らうとしたものであり、士と民との区別に対しては、なほ当然あるべきものとしてこれを認めていたといへる」と述べている。さらにこの思想と西南戦争を関連づけて「政府要人の敬天的態度の闕如と批判し、この敬天愛人にそぐはざる政府の欠漏に対して、はげしき憤りを発したのが、明治十年の乱の基底的原因であつたと観すべきであらう」

としている。

(46) 髪の毛の長いさま。

(47) みちふさがること。

(48) 天地のこと。

(49) 『全集』第六卷一九五頁。

(50) 『全集』第六卷二六〇頁。

— 主な参考文献 —

- ・西郷隆盛全集編集委員会編『西郷隆盛全集』（大和書房）
- ・『西郷南洲遺訓』（岩波文庫）
- ・『東京日々新聞』（日本図書センター）
- ・鹿児島県編集『丁丑乱概』（鹿児島県蔵版）
- ・家永三郎解説『海南新報・土陽雑誌・土陽新聞』（弘隆社）
- ・福沢諭吉『丁丑公論』（講談社学術文庫）
- ・内村鑑三『代表的日本人』（岩波文庫）
- ・田中惣五郎『西郷隆盛』（吉川弘文館）

- ・猪飼隆明『西郷隆盛』（岩波新書）
- ・井上清『西郷隆盛（上下）』（中公新書）
- ・安藤英男『西郷隆盛』（学陽書房）
- ・森茂暁『後醍醐天皇』（中公新書）
- ・笠原英彦『天皇親政』（中公新書）
- ・山崎道夫・和田正俊『叢書日本の思想家 吉田松陰・西郷南洲』（明徳出版社）

* 本稿は平成一四年徳島大学国語国文学会第27回研究会の口頭発表「西郷隆盛について」に加筆修正したものである。